

明治・大正期における幼稚園の建築と教育

－旭東幼稚園（岡山県）を中心に－

学校教育開発学コース 永 井 理 恵 子

Educational Functions of the Kindergarten Buildings in Meiji and Taisho Periods :

Three Cases in Okayama Prefecture

Rieko NAGAI

This paper explores the change of space composition in kindergarten buildings which supported educational practice in Meiji and Taisho Periods of Okayama Prefecture. This research examines the floor plans of the three buildings mainly, in the relationship with the contents and the methods of education at those times, too.

Three kindergartens in Okayama Prefecture are examined where early childhood education was actively developed since Meiji Era. They are Kyokuto(built in 1908), Shin-tei(in 1924) kindergartens in Okayama City and Kurashiki kindergarten(in 1915) in Kurashiki City.

Through comparing the three cases, this paper concluded two characteristic points as follows. Firstly, the activities of kindergartens in Meiji Period was mainly the seated ones in the room and it was over-emphasized the intellectual training. But in Taisho Period, they changed to the outdoor activities, and teachers promoted the physical and emotional development of the children. Secondly, the functions of all the space of the rooms and the corridor changed from specific to multiple. For example, the hall became the space for many activities. The corridor was used not only as the pass but also as the intermediate space for play between indoors and outdoors. The activity-room was transformed into the home-room. The corridor and the rooms of the three cases built in Taisho Period implicate the formal type continued in kindergarten buildings in Japan.

目 次

I. はじめに ー本研究の主題と方法ー

A. 研究の主題

B. 研究の方法と事例

II. 事例研究 ー教育実践と建築の変容ー

A. 旭東幼稚園建築（明治41（1908）年竣工）に示される明治後期の実践

B. 倉敷幼稚園建築（大正4（1915）年竣工）に示される大正初期の実践

C. 深柢幼稚園建築（大正13（1924）年竣工）に示される大正後期の実践

III. おわりに

注

I. はじめに ー本研究の主題と方法ー

A. 研究の主題

本研究は、明治・大正期の幼稚園建築¹⁾の変容を、教育実践の内容と方法との関連に注目して考察し、建築の平面計画から、教育実践を支えた空間構成の可能性を探ろうとする事例研究である。

わが国への幼稚園教育制度の導入は、明治5（1872）年制定の「学制」第22章における「幼稚小学」に始まる。「小学」入学以前の幼児を対象とする公教育も、教育の西歐的近代化を目指す政府によって、「小学」同様に制定された。実際に幼稚園が初めて設立されたのは明治8（1875）年12月で、京都市第三十区小学校（柳池小学校）の一角を借りて民間人によって開設された「幼稚遊嬉場」

である。一方、官立による初の幼稚園は明治9(1876)年11月に開設された東京女子高等師範学校附属幼稚園である²⁾。

幼稚園開設以後、現在まで、既に120年の時が過ぎた。この間の幼稚園教育を、様々な主題によって歴史的に考察しようとした先行研究は数多い。戦後になって進められた幼稚園教育に関する歴史研究の数々は、『日本の幼児保育—昭和保育思想史—』(穴戸健夫 1988)序章に詳しくまとめられており、まず通史から開始された幼稚園教育史研究が徐々に分野別の歴史研究へと移行してきたとしたうえで、思想史・地方史・人物史・運動史の分野別に主な著作が挙げられている。そして今後の研究課題として穴戸は次の3点を挙げており、(1)基本的資料の発掘・収集、(2)保育実践に直接かかわっている保育内容・方法・カリキュラムなどの研究、(3)運動的視点の導入が求められると述べている³⁾。穴戸の指摘に加えて佐藤秀夫は、教育実践史の検討に、具体的なモノのすがたを用いることが必要ではないかと述べている⁴⁾。その時代において使用されていたモノの形状とその使い方を分析することによって、モノ自体が表現する当時の教育方法や教育理念などを直接読みとることも可能であろう。そして様々なモノの中から、最も大きなモノであるといえる幼稚園の建築を対象として、この仮説が実証されるのかを検証することを試みたのが、本研究である。

B. 研究の方法と事例

本研究は、明治・大正期を対象期間とし、岡山県下に建設された3つの幼稚園建築を研究対象としておこなう事例研究である。岡山県を研究対象地域とした理由には、県立師範学校に附属幼稚園を設けたのが全国的に見て早期であったこと、これに続く民間立幼稚園の開設が数多く連続していたこと、そして幼稚園建築のデザインに独自のスタイルを用いていたことなどが挙げられる。

ここで岡山県における明治・大正期の幼稚園の建築と教育の流れを俯瞰しておく。岡山県下に幼稚園が創設されたのは明治17(1884)年9月で、岡山県師範学校附属幼稚科(後の岡山県女子師範学校附属幼稚園)が師範学校教場の一角に開設された⁵⁾。初代保姆には、東京女子高等師範学校出身であり、同附属幼稚園で実習の経験がある榎本常が招聘された。榎本は自らが学校で学んだことをもとに実践をおこなったとされ、開設当初の岡山県師範学校附属幼稚科の教育実践は東京女子高等師範学校附属幼稚園におけるそれをそのまま模していたと考えられる。その後明治19(1886)年より、民間人の手による幼稚園が設立され始めた。

明治18(1895)年には「岡山県幼稚保育規則」が作成され、これにおける保育項目は東京女子高等師範学校附属幼稚園の保育項目(明治14年6月のもの)と同一に設定された。これは明治32(1899)年に全国レベルの「幼稚園設備及保育規程」が制定されるまで、広く岡山県下の幼稚園で使用された。その後大正10(1921)年には「岡山市立幼稚園概要」が提示される。これには大正15(1926)年の「幼稚園令」の保育項目を先取りした内容が見られ、大正年間の岡山市における実践改革のさまをあらわしている。

次に建築の様子をみる。岡山県下に明治年間に開設された幼稚園は、当初は全て学校や寺社等を間借りしてスタートした。岡山県師範学校附属幼稚科は師範学校の一部で開設し、岡山市外で初めて開設された井原幼稚保育場(明治19年)や、明治20年開設の倉敷幼稚園の前身は、尋常小学校の一角を間借りしてスタートした。岡山市内に開設された川東幼稚保育場(旭東幼稚園の前身)は寺の境内で(明治18年)、又新幼稚保育場(深柢幼稚園の前身)は民家で(明治20年)実践を開始した。これらの園舎は全て、他の用途のための建築の代用であった。

岡山県下で明治・大正期に建てられた幼稚園建築は、その平面計画によって三つの類型に分類することができる。第一の型は、官立幼稚園として建てられ、県下初の幼稚園建築を明治22(1889)年に建てた、師範学校附属幼稚科の建築の類型で、明治中期頃までに見られる型である。その平面計画は、中廊下を中心にその南側と北側に保育室その他を配し、西側玄関より入って正面の東側に遊嬉室を配するというもので、これは明治9(1876)年に建てられた、同じく官立の東京女子高等師範学校附属幼稚園建築と基本的に同一の型であった。第二の型は、民間立として開園し代用園舎で数年から数十年の実践をおこなった後、明治末期から大正初期にかけて幼稚園建築を建てたという歴史をもつ建築の類型である。明治41年の旭東小学校附属幼稚園建築、大正3年の井原小学校付設幼稚園建築、大正4年の倉敷小学校附属幼稚園建築などが、これにあたる。第三の型は、大正後期に岡山県女子師範学校附属幼稚園建築が新築された(大正11年)時期以降に建てられたもので、民間立でスタートした幼稚園が大正期の実践改革を経た後に建てられた建築群である。例としては、大正13年新築の深柢小学校付設幼稚園などがある。これらの類型の中から、本研究では、第二と第三の類型に見られる、民間立でスタートした旭東幼稚園・倉敷幼稚園・深柢幼稚園の建築を対象とする。

II. 事例研究 - 教育実践と建築の変容 -

A. 旭東幼稚園建築（明治41（1908）年竣工）に示される明治後期の実践

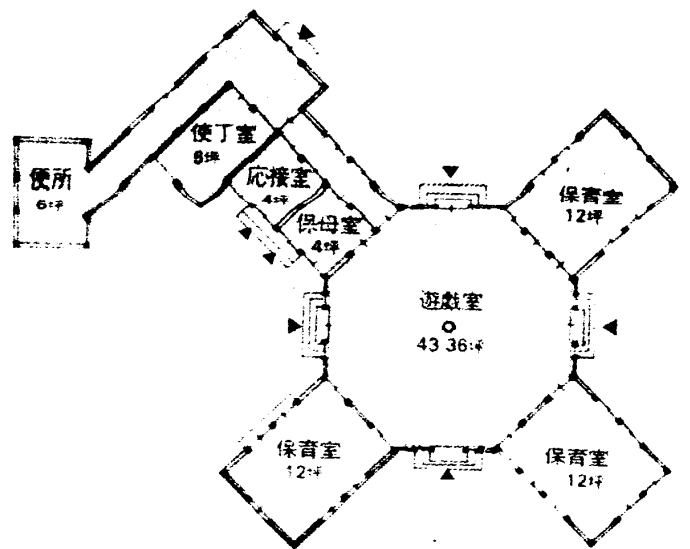
旭東幼稚園は明治18（1885）年、岡山県師範学校附属小学校訓導によって、岡山市内を流れる旭川の東の小橋町内、国清寺の境内を借りて、川東幼稚保育場の名称のもとで開園された。明治20（1887）年10月には、岡山県師範学校幼児保育講習会第一回卒業生2名が保姆として招聘され、翌明治21（1888）年4月からは環翠尋常小学校の一角へ移った。その後明治27（1894）年には同小学校の敷地内に、木造和式の建築を建て、これ以降、明治41（1908）年7月に新建築へ移転するまでの14年間、この和式建築で実践がおこなわれていた。

明治28年以降、現在の岡山市立旭東幼稚園に至るまで、旭東幼稚園は継続して公立として運営されている。しかしそれ以前のこの幼稚園は、私立として開園してから運営形態が数回変化した。明治27年に私立となった時に、小学校敷地内に幼稚園の建築が建てられており、私立の幼稚園が公立小学校の敷地内に建築をもつという独特の形式となった。翌明治28年には再び公立となっている。明治39（1906）年に環翠尋常小学校が他の小学校と合併されて移転することになり、小学校の新築と共に幼稚園も移転して新築されることになった。明治41（1908）年5月、環翠尋常小学校及び附属幼稚園はそれぞれ旭東尋常小学校及び同附属幼稚園と改称し、同年7月1日に新しい建築に移って開校・開園式がおこなわれた。

明治27年に私立として再開する折の「設立具申書」中においては、独自の保育項目が提示され、それまで実践していた「読み方」「書き方」「数へ方」の3項目が廃止された。その後明治32（1899）年には文部省より「幼稚園保育及設備規程」が公布され、これ以降は旭東幼稚園も、これに示された保育項目を視野にいれつつ実践改革をおこなっていったのである。本稿で研究の対象とする建築は、明治41（1908）年6月に竣工した建築である。図1は、この建築の平面図である⁹⁾。

1. 遊戯室と保育室との位置関係

この平面計画の最大の特徴は、遊戯室と保育室との配置の手法である。遊戯室が建築の中央に置かれており、その3方に3つの保育室が、廊下なしにじかにつながられている。保育室が一行に並ぶスタイルの場合では保育室によって大きく異なる遊戯室と保育室との距離が、この建築では全く同一になった。これは設計者が、遊戯室と保育室との距離を最短にし、且つどの保育室の幼児も即時に遊戯室に集合できることを重視したためであると



4	総坪数	300坪	(990㎡)
	建坪	114坪	(376.2㎡)

図1 旭東幼稚園建築（明治41年竣工）略平面図
（岡山市立旭東幼稚園『旭東幼稚園のあゆみ』1980）

考えられる。当時の実践の内容を、明治27年提出の「設立具申書」によって確認すると、第一番目に「会集」が設定されている。この活動は唱歌を練習したり、「近易ナル作法」⁷⁾を教えたりする活動であるが、全園児を一室に集めておこなう点が「唱歌」や「修身話」といった他の活動と異なる特徴であった。明治32年制定の「幼稚園保育及設備規程」において会集は削除されたが、東京女子高等師範学校附属幼稚園をはじめとする全国の幼稚園で相変わらず毎朝必ずおこなわれていた。これを全国の幼稚園が実際に中止するのは明治40年代半ばから大正期に入ってからである。この「会集」は毎朝必ずおこなわれる活動であったため、それをおこなう遊戯室と、各保育室との距離を等しくし、一斉に集合できるよう便宜を計ったのがこの平面計画であろう。

その一方でこの幼稚園建築は、保育室と遊戯室とをじかにつながった計画であったため、中央遊戯室は時としては、通路としての廊下の機能も担わされることになったと考えられる。遊戯室が独立した保育の室として使用されるものであったのであれば、このような設計には大きな問題が生じたことであろう。しかしこの平面計画が実施されたということは、設計当時の旭東幼稚園の遊戯室は、全園児が集合しておこなう会集や、それにつながる各種の話にのみ使用される室として考えられたものとみ

なすことができる。

すなわちこの建築が設計された当時の旭東幼稚園では、遊戯室における会集と、保育室における恩物活動とが同格で最重視されたため、何はともあれまずこの二つの活動を円滑におこなうための空間づくりが考えられたといえる。

2. 保育室同士の位置関係

この計画では、各保育室は全て独立している。隣に保育室はなく、それぞれの保育室が遠く隔たり音も動きも他の保育室の影響を受けないよう考えられている。

これは、保育室相互の関係性を重視せず、それぞれの保育室における活動が独立して展開できるようにという配慮と考えられる。当時保育室でおこなわれていた実践の内容と方法が、保育室の独立を求めるものであったとも考えられるので、それらを見てみよう。

明治27年提出の「設立具申書」を見ると、「会集」の他の活動として「修身話」「庶物話」といった各種の話、「木ノ積立」「板排べ」「箸排べ」「輪排べ」「紙組ミ」「紙剪り」「紙刺シ」「縫ヒ取り」「珠繋ギ」「豆細工」「画キ方」のフレーベル恩物遊具を用いた活動、「唱歌」、「遊嬉」が挙げられている。各種の話は必要に応じて教材を示しながら、問答形式でおこなわれた。当時のフレーベル恩物を用いた活動は、各保育室で集合机を使用し、保姆の指示どおりにおこなっていたという⁹⁾。

この建築における保育室は、恩物活動中に十分に集中して取り組めるよう、保育室を全て独立させて静かで落ち着いた空間演出を試みたといえる。問答形式で各種の話をおこなっている他の保育室の喧騒も響いてこないように考えられている。すなわち当時の保育室における活動は主に集中を要する学級単位の活動に限定されていたといえる。

3. 建築の内部と外部との関係

建築内部と外部との関係について見ると、保育室からは直接外部へ出ることはできず、遊戯室にある4ヶ所の出入口、または玄関から出るようになっている。保育室が建築外部と直結していないという特徴は本建築のみならず、東京女子高等師範学校附属幼稚園を初めとした当時の幼稚園建築に広く見られる特徴である。

これはすなわち、当時のわが国の幼稚園では戸外活動がさほど重視されていなかったことを示している。開設時の第一の目的として「智の育成」が掲げられ、室内におけるフレーベル恩物活動を最重視してきたわが国の幼稚園教育は、園庭を教育活動空間のひとつとして認識せず、課間に軽く遊戯や体操をする場所としてしかとらえてこなかったことが、ここに実証される。幼児が保育室

と園庭とを頻りに往来するような実践は、東京女子高等師範学校附属幼稚園では明治40年代に入るまで出現しない。こうして保育室と園庭は長期にわたって切り離され、この旭東幼稚園建築でも同様に、両者は分断されているのである。

4. 実践を支える社会的状況

「岡山県保育史」における記述は、この建築の設計の基本姿勢として「良家の大切な子女を保母の目のとどくところへおいて、けがやあやまちなないようにしようという消極的な保育観の現われであったとも思われる」⁹⁾と述べている。この記述にもあらわれているように、旭東幼稚園の建築は、風車型の形状自体に加え、建築内外の多くのガラス障子戸や、完全に孤立した各保育室など、保母の目がゆき届くやすく、幼児の管理の点で非常に優れた設計がされている。

このように、幼児の管理がしやすい形態を導入したことと背景には、当時の実践の内容・方法・形態的特徴と、それを背後から支える、旭東幼稚園の有する社会的状況とがあったものと考えられる。当時の実践は既に述べたように、予め保母によって定められ、またごく限られた種類の内容を、保母の指示によっておこなう一斉保育形態でおこなわれていた。幼児は自らの興味関心に応じて課題を見つけて取り組むのではなく、保母の指示によって内容も方法も時間も決められた活動に取り組んでいた。このような実践を円滑に進行させるためには、全ての幼児を保母が把握し、動かすことのできるような環境の設定が必要だったのである。

保育形態を考えるに際しては、保母一人当たりの担当幼児数も考慮しなければならない。当時の旭東幼稚園は、非常に多くの幼児が通園していた。明治34年3月の集合写真には179名の幼児と4名の保母とが写っており、新建築移転前の幼稚園は正規の在籍者かどうかはともかく、非常に多くの幼児を教育していたことが示されている。保母一人当たり45人の幼児を受け持っていたのであれば、方法は一層保母主導型のものとならざるを得ない。そこで管理に適した建築が求められたのであろう。

では、旭東幼稚園はなぜこのように多くの幼児を抱えることになったのか。その要因のひとつとして、当時の旭東幼稚園の保育料が安価であったことが考えられる。当時の保育料は家庭によって月額15銭・10銭・5銭の3段階と定められ、予算では全園児が5銭払うものとして計画し、不足分は市の補助によって賄うことになっていた。同時期の東京市下の幼稚園の保育料が私立・市立共に一律50銭¹⁰⁾、岡山県女子師範学校附属幼稚園が35銭¹¹⁾であることと比較すると、旭東幼稚園の保育料が特に低

く押さえられていたことがわかる。このことから、旭東幼稚園に幼児を通園させることが経済的に比較的容易であったとも考えられる。

以上の考察から、旭東幼稚園建築の可視性の高さの要因は、「良家の子女」教育のための消極的なものというよりも、当時のこの幼稚園の教育内容・方法・形態の点からみて不可欠なものであったと見ることが妥当であろうと考えられる。

旭東幼稚園建築が設計された当時の教育実践は、全園児が集合しておこなう連日の会集と、学級単位でおこなう恩物活動とが非常に重視されたことが、遊戯室と保育室との位置関係に示されている。この建築は、このふたつの活動を円滑におこなうための平面計画であることが、設計の主旨であった。恩物活動をおこなう時には、周囲に気を取られず精神を集中させておこなうことが要求されていたことが、保育室をそれぞれ分離し孤立した室として配置したことに暗示される。建築外部に非常ににくい設計は、この当時は戸外活動が比較的低い位置に置かれ、殆ど実践されていなかったことを示す。以上のような教育内容構成に加えて園児数が非常に多かった明治末期の旭東幼稚園では、明治期特有の一斉保育・保姆主導型で管理的な保育実践がおこなわれていたことが、建築から分析されるのである。

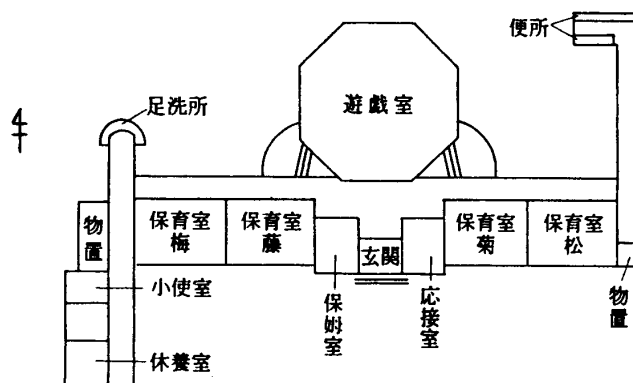
B. 倉敷幼稚園建築（大正4（1915）年竣工）に示される大正初期の実践

旭東幼稚園建築が建てられてから7年後の大正4（1915）年、倉敷市の倉敷尋常小学校附属幼稚園（倉敷幼稚園）の建築が竣工した。明治20（1887）年に村長と小学校長の意志によって細々と実践が開始された創設時には小学校の一室を間借りし、その後、寺の境内、女学校の一部と移転を繰り返し、この新建築に移ったのである。

図2は倉敷幼稚園新建築の平面図である¹²⁾。全体の平面計画は、北側片廊下・南側保育室（学校の場合は教室）長方形型という、この当時から現代までの学校建築に一般的なスタイルを基本にし、北側中央に遊戯室を突出させて配置したものである。明治40年代から大正初期の、短期間ではあるが教育理念や実践内容・方法が大きく変化した期を経て建てられた幼稚園建築である。

1. 保育室の配置

この建築における保育室は、東西に長い長方形の本棟の中に用意された。全室南向きに配置された保育室は、遊戯室とは完全に分離され、一本の廊下で連結されてい



建	坪	約172坪	(568㎡)
遊	坪	約 40坪	(132㎡)
保	坪	約 12坪	(40㎡)

図2 倉敷幼稚園建築（大正4年竣工）略平面図
（倉敷市史紀要第1号 倉敷の歴史 1991）

る。遊戯室と園庭はこの保育室棟の北側に配置されることとなった。

すなわちこの建築においては、保育室が、遊戯室や園庭よりも優先して、建築南面の最も良い環境を与えられている。保育室は北や西は勿論、東に面している室すらなく、全て南向きである。この保育室棟の保育室と廊下の配置は、小学校建築において、明治28（1895）年の「学校建築図説明及設計大要」で推奨されて以来用いられてきたスタイルで、学習機の左側からの採光に優れたものである。この室配置が導入されたことは、建築当時の倉敷幼稚園の実践がまだ学校教育実践と類似した形態中心であり、保育室における恩物活動中心であったことを示すと見ることができる。明治40年代から、岡山県女子師範学校附属幼稚園や旭東幼稚園などの県下の幼稚園では、保育室における恩物中心の教育が主流でありながらも戸外活動を重視する動きが出現し始めていた。しかし大正初期の倉敷幼稚園新築時には、まだなお保育室が最も重要な活動の場として認識され、園庭の活動は重視されるに至っていなかったことが、この保育室の配置に示されている。ここでは恩物中心の内容構成からの脱却は計られていなかったとみなすことができるだろう。

2. 遊戯室の配置

この建築における遊戯室は、保育室棟と分離され、北側に突出するように配置された。これは、遊戯室と保育室とを廊下を隔てて配置することにより、遊戯室の活動音が保育室へ影響を及ぼさないようにと考えられたことと、遊戯室は遊戯室で保育室とは独立した保育空間とし

て機能するように工夫されたことを示している。

これはすなわち、当時の遊戯室における保育活動の内容と方法とが、明治期から変容したことを示す。まず遊戯室においておこなわれていた活動のひとつである遊戯について考える。明治末期になると、それまでおこなわれていたような、保姆の指示に従い決められた簡単な振りをつけて歌う「表情遊戯」に対する疑問が唱えられるようになった。「京阪神連合保育会雑誌」には、従来の数限られた「表情遊戯」を繰り返すことによって生じるマンネリズムを問題視した保姆たちによって、新しい「表情遊戯」を開発するべく作成された遊戯が多く紹介されている。これらの試みは大正中期以降「律動遊戯」として土川五郎により体系化されるが、多くの保姆や土川が求めた新しい遊戯は、幼児が楽しみながらも十分に身体全体の筋肉を動かすことができるものであった¹³⁾。そのためには幼児が身体を大きく動かすことができる動きと、快活な気分を起こさせる歌曲とが必要であると考えられた。このような要素を持つ遊戯をおこなうためには、音響の面から遊戯室と保育室とが隔たっていることが重要であった。保育室における恩物活動が重視されていた時代、保育室における静的活動の主座を維持しつつ、遊戯室における新しい遊戯をおこなうためには、遊戯室を保育室から分離することが必要だったのである。

一方、この時期には、保育室における恩物保育が中心に置かれていたとはいえ、内容の拡大により、限られた広さしかない保育室内ではおこなえない活動も試みられてきていた。当時、岡山市立幼稚園長を兼任していた折井彌留枝は、明治末期より、「幼児生活の共同化」を重視した保育を実践しており¹⁴⁾、倉敷幼稚園の新建築においても、遊戯室において七夕の製作を多くの幼児がおこなっている写真が残っている¹⁵⁾。これらの実践の記録にも示されるように、この時期の遊戯室は、会集と遊戯をおこなう場所であるのみならず、保育形態に応じて手技もおこなう室となった。ちなみに東京女子高等師範学校附属幼稚園でも、遊戯室において、全園児による共同活動が大正中期に実践されている¹⁶⁾。すなわち遊戯室は、活動をおこなう室としての役割を一層数多く担うことになったわけで、ひとつの実践の室として独立しているものでなければならなくなり、また旭東幼稚園建築のように通路にもなってしまうものでは問題が生ずるようになった。その結果、保育室と遊戯室とを分離させたとも考えられる。

3. 遊戯室と保育室との関係

保育室棟北側に配置された遊戯室は、主玄関を入れて正面、保育室の中央に置かれた。遊戯室と各保育室との

距離は、建築棟を別棟にしたために若干離れたが、それでも可能な限り最短にしようと考えられている。これはすなわち設計段階において、幼児が保育室と遊戯室とを往復することを考慮していたことを示す。これは次の2点から説明できよう。

第一に、当時の倉敷幼稚園では、会集がまだおこなわれながらも、その意義を問いなおす動きがあったと考えられる。連日の会集は、明治末期から大正期にかけて徐々に全国的に中止されていくが、岡山市下では大正10(1921)年に示された「岡山市立幼稚園概要」において「必要ニ応ジテ」おこなえばよいと明示される¹⁷⁾。倉敷幼稚園が新築された大正4年前後は、全国的に会集の見直しが進められていた時期であった。この倉敷幼稚園建築における遊戯室と保育室との微妙な距離は、当時の倉敷幼稚園において、会集がそれなりに実践されていたながらも、それをおこなう意義について検討しているという状況が暗示されているともいえる。

第二に設計当時の遊戯室は会集と遊戯のみならず、活動形態に応じて手技もおこなう室となっていた。そのためには遊戯室が、保育室から近い位置にあることも重要であった。どの保育室の幼児も手軽に遊戯室を使用できるように考えられたともいえるのである。

4. 建築の内部と外部との関係

この建築における保育室棟北側廊下の北面は壁はなく吹きさらしであるが、全面に腰板が張られており、ここから外部へ出ることはできない。保育室から外部へ出ようとする際には、遊戯室の、廊下側左右二ヶ所に設けられた出入口か、主玄関を通らなければならない。これはすなわち、当時の倉敷幼稚園では、戸外活動がさほど重視されていなかったことを示す。園庭が保育室棟の北側に設けられていたことも、このことを裏付けている。

岡山県女子師範学校附属幼稚園では、明治40年代に岡政が赴任してくるやいなや園庭の改造が計られ、戸外活動が重視されるようになった。また折井も岡山市立の各幼稚園において戸外活動を重視し、園庭が狭いために園外保育を多く実践した。大正4年に倉敷幼稚園建築が建てられる以前の県下でこれらの動きがあったのであるが、この時期の倉敷幼稚園においては戸外活動の積極的な導入はおこなわれていなかったと見られよう。

以上のように、倉敷幼稚園の建築には、明治期の旧態依然とした実践から、新しいそれへと変容していく当時の状況が示されている。設計期間と見られる大正2～3年頃の活動の中心は、学校教育における学業と同様の座業形式によるフレーベル恩物活動に置かれていたことが、

保育室棟の設計に見られる。しかし教育の内容と方法は拡大し、手技においても共同活動が採り入れられ始めていた。会集を絶対視することに疑問が出されたことも、遊戯室と保育室との関係から想定できる。すなわち新しい理論の考察の時期と、それを実践に移していく時期との狭間にある実践の状況が、この建築に示されているのである。

C. 深柢幼稚園建築（大正13（1924）年竣工）に示される大正後期の実践

最後に、大正期の保育実践改革後に建てられた岡山市内の幼稚園建築の事例を見る。

ここで、採り上げる深柢小学校付設幼稚園（深柢幼稚園）は明治20（1887）年、私立幼稚保育場として、市立又新小学校の一角に開設された。開設の経緯は旭東幼稚園と同じく、地域住民らの共同運営としてスタートしている。その後明治23（1890）年の小学校統廃合によって晚翠小学校と合併した又新小学校は東中山下へ移転し、幼稚園も移転して長屋風民家を使用することになった。明治32（1899）年には、元中国鉄道事務所として使用されていた建築へ移転したが、これもやはり民家として建てられたものであった。その後明治44（1911）年には、旭東幼稚園長であった折井彌留枝を兼任園長として迎え、大正期にかけて多くの実践改革がおこなわれた。大正13（1924）年、幼稚園は土地を購入して移転することとなり、初めての幼稚園建築を建てることになった。新建築

の平面計画は図3¹⁸⁾のようであった。但し遊戯室部分は、大正14年に、第二期工事として造られている。

1. 保育室と廊下の配置

この建築は保育室を始めとし、総室数が10室以上設けられた、当時の幼稚園としては大規模な建築である。平屋建てとする場合、全体構造を片側廊下の長方形にしたのでは非常に長くなってしまいうため、途中で折り曲げて鍵型のプランになったと考えられる。

保育室棟は、北側棟と西側棟から成っている。西側棟は全て保育室が配置されており、東側棟は遊戯室への渡り廊下に最も近い位置に保育室が一室ある他は各種の大人用の室が配置されている。そしてこれらの室をつなぐ廊下は、北側棟は南側に、西側棟は東側に配置されている。すなわち、建築は南側園庭を囲むように建てられており、園庭側に南面した位置には廊下が設けられ、一方の保育室は西側や北側に面しているのである。

この保育室と廊下の配置は、Bで考察した倉敷幼稚園建築の保育室棟におけるそれらの配置と、全く相反するものである。この深柢幼稚園建築では、陽当たり良好な南面には廊下があり、保育室が最も良い位置に置かれていない。このことは深柢幼稚園建築の廊下が、「擬洋風建築」スタイルによる幼稚園建築のように、通路としての機能しかもってなかったのではないことと、保育室内での保育活動よりも戸外での活動が重視されたことを示している。

深柢幼稚園建築の廊下は、わが国の伝統的建築における縁側と同様に、南側に配置された。Bで述べたように、倉敷幼稚園建築保育室棟に見られたような南側教室・北側廊下の計画が学校建築において最良であると考えられていた大正期に、あえて深柢幼稚園がこのような計画を導入した背景には、この幼稚園がそれまで実践をおこなってきた建築のスタイルが影響していると考えられる。深柢幼稚園は30年以上にわたって幼稚園建築を有する機会が得られず、和式民家で実践をおこなってきた。明治32年以降に使用した民家の図面には、5つの保育室が廊下で連結されていたのではなく、矩形の建築の内部を襖などで仕切って設けられていたことが示されている。図面には描き込まれていないが、当時の民家の形態から考えて、この建築の周囲には縁側が設けられていたものと推測できる。縁側があれば、そこから出入りしたり、そこで自由に遊ぶことが、縁側のもつ物的環境の特質として自然におこなわれてきたと考えられる。単なる通路ではなく、そこで寛ぎ、遊び、庭を愛で、室内と庭を自然と連結する空間である縁側¹⁹⁾を長く使用してきた深柢幼稚園が、新建築設計時に縁側の優れた特性に着目し、廊下

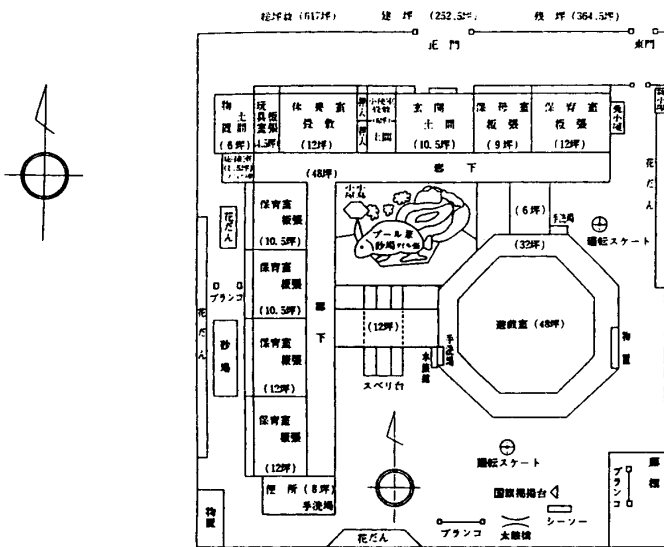


図3 深柢幼稚園建築（大正13～14年竣工）略平面図
（岡山市立深柢幼稚園『深柢幼稚園の八十年』1968）

を南面に配置したとも考えられる。

2. 建築の内部と外部との関係

深柢幼稚園では明治20年代により、園庭に砂場・ブランコ・藤棚・すべり台を設け戸外活動をおこなっていた。明治44(1911)年に赴任してきた折井は、旭東幼稚園での実践と同様に深柢幼稚園でも、幼児の健康の育成に重点を置いた教育を重視し、戸外活動を積極的に取り入れた実践をおこなった。大正5(1916)年に拡張した園庭には小高い山や蓮池などがあり、幼児はそこで遊ぶ機会が与えられていた²⁰⁾。すなわち建築内外の実践が、民家建築のもつ縁側の特性の力を借りて円滑に進められたともいえよう。

大正13(1924)年の新建築では、ブランコ2台、砂場2ヶ所、藤棚がもちろん配置され、更に園芸に関する設備として花壇が多く設けられた。この新建築において、廊下から直接園庭に出られるようになっていたかどうかを示す記述は残されていないが、図3を見ると、遊戯室への渡り廊下の内側に砂場やプール、小鳥小屋があることや、手洗場が渡り廊下と遊戯室の接続場所に設けられていることから、廊下のいずれかの場所から直接園庭に出入りしていたと考えられる。深柢幼稚園では既に明治期から適宜おこなわれていた戸外活動が、大正10(1921)年制定の「岡山市立幼稚園概要」において特に重視されるようになった。この概要は深柢幼稚園長の折井と附属幼稚園主任の岡が中心となって作成したと考えられており、折井が自らの携わる深柢幼稚園の戸外活動重視型の実践も念頭に置きながら作成したとも考えられる。深柢幼稚園の新建築設計時には既に概要も制定されており、あらためて戸外活動を重視した実践に着目したうえで設計する際に、まず南側を園庭としたうえで廊下を縁側のように園庭に面して配し、保育室を廊下を隔てて園庭の反対側にもってくるという基本計画を立案したのではないだろうか。

すなわちこの大正末期の深柢幼稚園では、保育室内における活動に教育の重点が置かれていたのではなく、戸外活動が非常に重視されていたといえる。ただしこれは新建築竣工3年前に市によってその重要性が認められたために突然重視されるようになったのではなく、その背景には深柢幼稚園において長くそれを重視してきたことがあり、初めての幼稚園建築を建てる機会を得て、その教育のありかたが顕在化したのである。長きにわたる戸外活動の重視には、幼稚園の位置する地域環境の状況や、実践を支えてきた民家建築の特性があったことも重要であろう。

3. 遊戯室の配置

この建築の遊戯室は、本棟の竣工に遅れること1年の大正13(1922)年に竣工した。遊戯室の位置は園庭の中央で、本棟から遠く分離して廊下を渡っていくようになった。遊戯室は8面に開口部をもつ開放的なつくりで、この外には一周ぐりと外廊下が設けられた。園庭中央に遊戯室を配置したために、園庭には広くまとまった空間がなくなってしまった。遊戯室の形状は旭東幼稚園や倉敷幼稚園と同じく八角形である。

まず、遊戯室が保育室から遠く離れ、渡り廊下で連結されたことにより、遊戯室内の活動音が保育室に届きにくくなった一方で、各保育室と遊戯室との距離は遠くなった。このことはすなわち、つぎのことを示すといえる。明治期には連日おこなわれていた会集は、市立幼稚園概要において「必要ニ応ジテ」おこなえばよいものと明示されたのはBで述べたが、深柢幼稚園でも連日会集をおこなわなくなっていたと見られる。保育室と遊戯室との従来の便を計った平面計画とは言いがたいからである。遊戯室における主な活動で、会集が重視されなくなった後に残った活動は「遊戯」である。大正後期には土川五郎の新しい「律動的遊戯」が発表され、これは大正10年の「岡山市立幼稚園概要」にも明示された。一層の動きや音を伴う遊戯である「律動的遊戯」が、深柢幼稚園でも活動の一翼を担うものとなっていたことが、遠く分離された遊戯室の位置に現われている。

しかし、園庭の中央に遊戯室が配置されたことがすなわち、園庭における戸外活動がまだ十分に重視されていなかったことを示していると思なすわけにはいかない。園庭が南側に配置され、保育室棟が園庭の北側と西側に配置されたこと自体が、既に戸外活動を重視した結果であることは、2において論述したところである。むしろこの遊戯室の配置は、戸外活動を重視して設けた南側園庭の中に、雨天用・「律動的遊戯」用の“屋根と床のある空間”(すなわち遊戯室棟)を併置したものと判断すべきである。確かに園庭の戸外には、一学級の幼児が輪になって「律動的遊戯」をおこなう空間的余地はない。しかしこれをおこなう場合には、園庭内部にある遊戯室でおこなうことができ、ここでおこなえば採光も充分なうえ地面を気にせず十分に体を運動させることができる。また「岡山市立幼稚園概要」の保育項目「遊戯」に示された模倣遊戯や玩具遊戯は、使用する玩具や遊戯の方法によって、園庭戸外のみならず遊戯室まわりの廊下や本棟の廊下でおこなうこともできる。自由遊戯や競争遊戯は、内容に応じて遊戯室内、外廊下、建築外部のいずれでもおこなうことができる。無論「園芸」「観察」活動

は、戸外空間でおこなう。

このように考えると、この建築における遊戯室やそのまわりの外廊下、そして本棟の南側廊下と東側廊下は、全て園庭の延長線上にあり、半園庭的な位置付けられたをしているといえる。そして園庭と半園庭空間が建築南側に配置されたことは、これらがもはや保育室の隷属物ではなく、保育環境の主座に位置するものとなったことを示す。この建築における遊戯室は、会集と表情遊戯の室として存在していたものから完全に脱却し、あらゆる遊戯をおこなう室内空間として考えられているといえる。

大正10年の「岡山市立幼稚園概要」で示された会集・園芸・遊戯・談話・手技・唱歌・観察の7項目のうち、深柢幼稚園において主に園庭・半園庭空間でおこなわれたと考えられる活動は、園芸・遊戯・観察であり、談話・唱歌は場合によっておこなわれたと考えられる。深柢幼稚園の建築南面に園庭・半園庭空間が配置されたことはすなわち、当時の深柢幼稚園では上記の活動が重視されるようになっていたことを示す。その一方で遊戯室が保育室から遠く分離されたことは、連日の会集がこの幼稚園でもおこなわれなくなっていたことを示し、保健衛生面から不適であるとされていた北側・西側保育室が実施されていることは、保育室でおこなわれる主な活動であった手技が、保育項目全体における主位から転落したことを示しているのである。

Ⅲ. おわりに

本研究では、明治末期から大正期に建てられた3棟の幼稚園建築の平面計画を分析することにより、実践の内容と方法とを支える空間構成の変化を考察してきた。本研究は、明治40年代から大正期の、岡山県という一部の地域を対象にした事例研究にすぎないが、これらの事例を見る限りにおいて、以下の2点が結論づけられる。

第一に、この時期における保育内容の変容が明らかになった。すなわち明治期には保育の中心と考えられていた「会集」とフレーベル恩物活動が大正後期までに徐々に重視されなくなった一方、単調だった「遊戯」が幅広くなり、戸外活動が多く採り入れられるようになって、幼児の身体的・情緒的成長発達を総合的に援助する保育へと転換したことが、空間構成の変化に示されていた。

第二に、明治末期から大正期の幼稚園建築における一つひとつの空間の役割の変化が明らかになった。

遊戯室は、「会集」と狭義の「遊戯」のみに使用され

る空間から、新しい保育形態でおこなうさまざまな「手技」や、広義の「遊戯」を含む多様な保育活動に使用される、多くの機能を兼ね備えた空間へと変化した。

廊下は、戸外活動の重視に伴い、園庭と保育室をつなぐ半戸外空間としての機能を担うこととなった。これによって廊下は、従来の北側廊下から園庭に面して南側に設けられるように変化した。ここにおいて、幼稚園建築の廊下は、常に小学校建築の廊下を範としてきたそれまでのありかたから脱却し、幼稚園建築独自の廊下スタイルを獲得したのである。これ以後、南側廊下は、幼稚園建築における廊下のスタイルの定型として位置づくこととなった。

保育室は、明治期には、幼稚園教育における主活動であったフレーベル恩物活動や話を聞く活動をおこなう室であるという明確な機能をもった空間であった。しかし大正期になると、保育内容の重点の変容に伴い、保育室のもつ機能は曖昧なものとなった。すなわち保育室は特定の活動をおこなう室として機能しなくなり、むしろ各学級の活動拠点として、広範な機能を有する空間となった。この保育室の機能の曖昧性と広範性も、以後の幼稚園建築に典型的な要素となって定型化した。

本研究の考察は、ごく限られた事例によるものであるが、ここに今日の幼稚園建築の定型の形成過程の一端を見ることができる。今後は他の時代や地域を対象とした考察とも併せて研究を深め、幼稚園建築の平面計画の定型化の過程とその意味とを考えていきたい。

注

- 1) 幼稚園の建築は、「建築」の他、「建物」「園舎」「施設」等の表現が一般に用いられている。本稿においては、幼稚園として使用されたものの全てを「園舎」と表現する一方、特に立案当初から幼稚園として用いることを前提として計画・設計されたもののみを「建築」と表現している。
- 2) 永井理恵子 1992 保育環境としての施設・設備に関する一考察① 幼児の教育 第91巻 第11号 p.22
* 東京女子高等師範学校は、明治7(1874)年の開設当初の名称は「女子師範学校」であり、その後明治23(1890)年に東京高等師範学校から独立した女子部を合併して「女子高等師範学校」と改称された。そして明治41(1908)年に奈良女子高等師範学校が開設された際に再度改称され、「東京女子高等師範学校」となった。このように正式名称が数回変更されたが、本稿では時期を問わず一貫して「東京女子高等師範学校」を用いている。
- 3) 矢野龍夫著『日本の幼児保育—昭和保育思想史—上』青木書店、1988、pp.9-10
- 4) 佐藤秀夫 1976 地域教育史研究の意義と課題 教育学研究 第43巻 第4号 p.267
- 5) 岡山大学教育学部附属幼稚園『附幼百年のあゆみ』1985、p.1
- 6) 岡山市立旭東幼稚園『旭東幼稚園のあゆみ』1980、p.6

- 7) 岡山市立旭東幼稚園所蔵史料
- 8) 文部省 『幼稚園教育百年史』ひかりのくに(株) 1979, p.66
- 9) 岡山県保育史編集委員会編 『岡山県保育史』フレーベル館, 1964, p.101
- 10) 東京都立教育研究所編 『東京都教育史 通史編 二』1995, p.110
- 11) 前掲9, p.126
- 12) 永井理恵子 1991 旧倉敷幼稚園建築に関する考察 倉敷市史紀要第1号 倉敷の歴史 p.63 (倉敷市歴史民俗資料館所蔵史料を印刷したもの)
- 13) 土川五郎 1917 幼稚園の遊戯に就て 京阪神連合保育会雑誌 第17巻 第9号 pp.330-336
- 14) 岡山市立旭東幼稚園所蔵史料
- 15) 倉敷市歴史民俗資料館所蔵史料
- 16) 池田とよ子 1918 動物園あそびの記 婦人と子ども 第18巻 第3号 復刻版幼児の教育 第18巻 pp.110-113
- 17) 前掲9, p.179
- 18) 岡山市立深砥幼稚園『深砥幼稚園の八十年』1968, p.102
- 19) 縁側の機能については, 中村昌生監修 和風建築の意匠 8 『「内と外をつなぐ」』学芸出版社 1990 に詳しい。
- 20) 前掲18, p.17